

初の草稿『語られざる哲学』は、近角が強調した「懺悔」を哲学の方法として取り上げ、「よき生活を可能ならしめる」ために「絶対者の存在」を要請する。そして、「語られる哲学の根柢」の探究を自らの課題とする。『パスカルに於ける人間の研究』では、パスカルの図式を借りながら、「宗教的不安」を真理探究への動力源としつつ、哲学がそれ自身では完結せず、宗教によって完結する姿を描いている。『構想力の論理』はパトスとロゴスの総合の根源を探究しつつ、その根源にあるものを見据えている。近角自身の説教の核心には、人間の情感・身体への深い理解と歴史宗教への洞察が存在していた。その洞察に共鳴をした、若き哲学者がその生涯にわたって探究した思想の意義を見通すという点においても、近角という視座は有意義なものだと思われる。

近代大谷派における近角常観の位置

ライアン・ワルド

近年、清澤満之（一八六三—一九〇三）に関する研究が多く発表され、清澤の教団改革運動（いわゆる「白河党運動」）が再評価されている。一方、清澤と同時代に活躍していた近角常観（一八七〇—一九四一）に関する研究は皆無といっていいほどないというのが現状である。さらに、昭和初期に近角が主唱していた「宗門革新運動」は日本近代仏教史の研究から完全に

忘却されている。それは何故であろうか。いくつかの理由はあるが、結論からいえば、晩年の近角は教団にとつて「厄介」な人物であったからではないか、という事である。そのため、彼の歴史的位置づけはややデリケートなものとなっている。

近角の「宗門革新運動」は昭和四年に僧籍を削除された大谷光演（句仏）（一八七五—一九四三）を擁護するという運動であったという意味に限っては、大谷家の伝統を護る運動であった。戦後における大谷派の「宗派改革」運動とはベクトルを異にしているため、やや不都合な事実であるかもしれない。しかし、近代における大谷派の歴史と教団の動向を考察するにあたって、これは不都合な事実ではなく、不可避な課題である。

近角によれば、句仏の僧籍削除は大谷家の連枝と阿部恵水（一八七〇—一九四五）内局による一種の「クーデター」であった。そのため、近角は、阿部内局を打破し、句仏の僧籍復帰を実現しなければならぬと主張した。横田秀雄（一八六二—一九三八 大審院長）、犬養毅（一八五五—一九三二 第二九代内閣総理大臣）、濱口雄幸（一八七〇—一九三一 第二七代内閣総理大臣）、山川健次郎（一八五四—一九三一 枢密顧問官／貴族院議員）、柏原文太郎（一八六九—一九三一 東亜同文会の幹事／衆議院議員）などといった有力な政治家に支持されつつ、近角の「宗門革新運動」は全国的に展開していく。時には激化したふしもあったため、当時のメディアに注目され、その動向が多く報道された。

近角が大正時代に出版していた『求道』といった「信仰告白雑誌」などに見られるように、彼は大谷派といった狭いセクタ

パネル

リアンな壁をはるかに超え、老若男女を問わず、全国的な信仰運動を展開させ、多くの人々を魅了した。しかし、一方、彼が起こした「宗門革新運動」といった事実でわかるように、彼は「法主」を中心としてきた大谷派の伝統・伝灯を非常に重視していた人でもある。換言すれば、近角は「近代代」な宗教活動をしていた反面、「反近代代」と定義される伝統主義者でもあった。こうした逆説的な事情を明らかにすることによって、日本近代仏教のあり方を新たに考察することが出来る。同時に、大谷派における「近代教学」の意義を再考する意味において、晩年の近角の位置づけは重要な課題であると思われる。

求道会館所蔵史料の意義

—— 整理作業中間報告 ——

大澤 広 嗣

本発表は、平成二〇——二一年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)「近代化の中の伝統宗教と精神運動——基準としての近角常観研究」(課題番号二〇五二〇〇五五、研究代表者 岩田文昭大阪教育大教授)の一環として実施している、求道会館所蔵史料の整理作業について、その中間報告を行うことを目的とする。

真宗大谷派僧侶の近角常観が信仰運動の拠点とした求道会館(東京都文京区本郷六丁目二〇番地五号)は、大正四年に落成

した地上二階の建造物で、信者と支援者などからの寄附金により建設された。設計は建築家武田五一で、施工は戸田建設創業者の初代戸田利兵衛である。昭和一六年に常観が没した後、弟の近角常音が活動を継承した。しかし昭和二八年に常音の死去後、長らく閉鎖されてきた。その後、史料は手付かずのまま、今日まで未整理で残されてきたのであった。なお会館は、平成六年東京都指定有形文化財となったことを機に、平成八年から修復工事が行われ平成一四年に完工した。現在、会館は各種行事に使用され、常観の令孫である建築家の近角真一氏が管理をしている。

本科研では、平成二〇年より求道会館所蔵史料の整理と目録化を進めてきた。研究代表者である岩田の指示により、研究協力者の大澤・碧海寿広・小田晃生によって作業を分担している。またライアン・ワルドからも協力を得ている。ならびに本科研では常観が発行に関係した雑誌『政教時報』(明治三二——三六年、大日本仏教徒同盟会)、『求道』(明治三七——大正一一年、求道発行所)、『信界建現』(昭和五一——三年、同所)の電子化を行った。当該のデータは、平成二一年一月発行の中間報告書にDVD・ROMとして所収した。

求道会館所蔵の史料群は、次のとおりである。主には、書簡・名刺・電報・領収書・帳簿類・日誌・写真・蔵書・各種書類・前掲雑誌の校正刷りと各執筆者の自筆原稿である。史料の総点数はまだ確定していないが、概算で約一万五〇〇〇点と考えられる。書簡については、平成二一年七月に仮目録の入力作業が終了して、その後は修正作業を進めている。平成二一年